

たんち山の夫婦たぬき

たんち山に、とつぜんお寺を建てることが決まりました。そんなある日、山ふもとの百姓彦兵衛にも、参道をつくるのにじやまになるから立ち退けと、村役人からのお達しがありました。

「お役人様、お願いがございます」

「かわりの土地をあたえるのに、不届があるのか」「とんでもない。それより、山を追われるたぬきやりすが、かわいそうでなりませぬ。それだけが心配です」

「たわけたことを申すな。畜生は、お主より利口でござる」

お役人は、彦兵衛夫婦のたつての願いに、家やそのまわりの大木や雑木をそのまま残し、そのかわりに畑の一部をひらくことを約束しました。

彦兵衛の家の縁の下で、耳を立ててこの話を聞いていた夫婦たぬきは、ほつとしたのです。りすの親子も、小さな目がしらを熱くしました。

何年かがすぎました。たんち山に立派なお寺ができました。そして村は、大普しんの祝いごとで喜びに明けくれたのです。

ところがどうしたことか、年がかわると、春のたつ巻とひょうに村がおそれ、また、夏から秋にかけて冷雨がつづきました。サトイモ畑に花がくるつて咲くなど、ふしぎな日がつづくのです。

その年は、彦兵衛の家でも不作でした。夫婦は子どもをねかせたあと、あすからの糧を心配していました。

「トン・トン」

うら戸をたたく音がします。彦兵衛が板戸をそつと開けると、たぬきが大きな腹づつみに一俵づつ、米俵をかかえていました。そのうしろにも子どもたぬきが、そろそろと小さな俵をかかえているのです。

彦兵衛がふしぎに思っていると、たんち山のたぬきが、恩返しにきたというのです。あくる日も、同じころまた戸をたたく音がします。こんどはたぬきにつれられた大ぜいのりすが、大豆や小豆や麦を、小さな両手で運んできました。

りすもたぬきに負けずに、せつせと恩返しにきだのです。

